

千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」と 「乳岩辨証」(「乳岩辨」)

——1811年における華岡青洲の「乳岩」治療の実際——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成27年12月19日／受理：平成28年6月3日

要旨：1811年仙台出身の千葉良蔵(1789-1861)は春林軒に入門したが、同年8月、入門して半年も経たない内に「辨乳岩証并治法艸稿」を書き上げた。この冊子は青洲の乳癌手術の教え、即ち乳癌の徴候と症状、鑑別診断、術前準備、麻沸散の投与、手術法、止血法、創口の縫合法、創口の処置、麻沸散による麻酔からの覚醒、術後の管理、内用薬、外用薬の処方などが記されている。この写本の書写が繰り返された過程で、他の論文などが付け加えられて「乳岩辨証」や「乳岩辨」と題名も変化した。千葉の写本は書写者や書写年代が1811年と明らかにされており、その当時の青洲の乳癌治療の実際を伝えている点で重要である。

キーワード：千葉良蔵、華岡青洲、辨乳岩証并治法、乳岩辨証、乳岩辨

1 はじめに

華岡青洲(以下「青洲」と略)の主宰する春林軒に1800年初頭以来、全国から医学生が蝟集した。その理由は長崎、京都、江戸という医学の中心地においてでき学ぶことが出来ない垂涎の医術を習得できるからであった¹⁾。その医術とは青洲が約二十年をかけて開発した経口全身麻酔薬「麻沸散」(または「麻沸湯」)を用いての各種の選択的手術であった²⁾。とりわけ青洲が大きな関心を寄せたのが乳癌の外科的治療であったことは、青洲の「麻沸散」開発の動機が乳癌の手術であったこと³⁾、「麻沸散」を使用しての手術第一例が1804年10月13日の藍屋 勘に対する左乳房の癌腫瘍摘出術だったこと、そして患者の名簿で唯一作成されたのは「乳巖(岩)姓名録」⁴⁾で知られるように乳癌患者だけであったことなどから、青洲の名はまず乳癌の手術的治療で全国の医師や医生に知れ渡ったことは間違いないし、医生たちも第一義的には乳癌の外科的治療法の習得を

目的に春林軒を目指したのであろう。もちろん「麻沸散」投与方法の技術、乳癌腫瘍摘出術の技術は他の部位の手術にも広く応用できるものであったからである。

したがって乳癌の外科的治療は華岡流の医術において中核を占めるものであり、青洲の医術を議論する上で看過できない課題である。そしてこの重要な課題を青洲がいかに門人に教えたかも非常に関心があるが、具体的なことは殆ど知られていない。例えば呉 秀三もその著の中で青洲の乳癌の治療に関して論じているが、青洲がいつ門人に口授し、誰が記録したのかについては言及していない⁵⁾。青洲も手術症例を重ねるにしたがって教授内容にも当然変化が見られたと思われるので、口授の時期が非常に問題となる。青洲の「燈火医談」⁶⁾、「青洲先生治験録」⁷⁾にも乳癌の記述は見られるが、記述の時期は特定できず、その内容は一般的なこと、建て前的事を述べるに留まって具体性に乏しく、現場での教育内容とは乖離しているように思われる。

本稿で紹介する「南紀青洲先生乳巖治術口授」を外題とする写本⁸⁾は1811年に仙台栗原郡出身の門人千葉良蔵が青洲の口述に、自分の経験や意見を加えてまとめたものである。内題は「辨乳岩証并治法艸稿」である。他の写本と比較しての考察の関係上、以下では内題をこの写本名として使用する。青洲の口述の内容が特定の人物によって記録され、しかも書写年代が特定されている例は少なく、さらに1811年という乳癌の手術が開始されて7年しか経っていない比較的早期における記録はさらに乏しい。しかもその内容を検討すると、この写本が後に流布することになった多くの写本「乳岩辨(弁)証」、あるいは「乳岩辨(弁)」の原本であると考えられるので、その辺の事情についても考察を加えたい。

2 千葉良蔵について

千葉良蔵の略歴については、出身地の資料「石越町史」⁹⁾、「宮城県医師会報」¹⁰⁾に載せられているが、詳細な経歴は1942年に玉手によって明らかにされている¹¹⁾。それによれば良蔵は伊達一門の岩谷堂岩城氏の藩医千葉胤熙の男で、1789年に生まれ、1861年に72歳で没した。良蔵は通称で、名は尚、諱は胤高、伯綱、明溪が号である。その学問の系統だけを簡単に記すと、1805年に東山赤生津村の郡山丹治の門に入り、1808年に仙台に出て大槻氏の門などで学んだ。1810年には京都に登り、吉益南涯に古医方を学んで、翌1811年には紀州に赴いて華岡青洲に、1812年には播州の小林逸霞堂、1813年には九州の青木玄室に師事した。1814年一旦帰郷したが、1815年再び修行の旅に出て、羽州、松前に遊び、さらに伊具郡角田(現在の宮城県角田市)で赤松氏に眼科術を学んだ。1819年父の死去に伴って帰郷した。郷里石越では「明溪庵」を営んで弟子の教育に当たったが、後に幕医となり法印に叙せられた石川桜所も門人の一人であった。この建物の門は現在も存在し、2013年7月、著者がご子孫の千葉陸美氏を石越に訪ねた際、良蔵の墓碑と共に拝見した。良蔵の墓碑は石越の昌学寺の千葉家の塋域に現存しており、高さ3m余の石碑に岡 千刀

の撰になる墓誌銘が刻まれており、青洲に学んだことについては銘文中に「従花岡氏於紀州脩外科方」とある。

上述したように、良蔵は1811年に紀州に赴いて春林軒に入門しているが、これは「華岡青洲先生春林軒門人録」の記述「文化八、閏二、一三仙台栗原郡石越邑 千葉良蔵」¹²⁾と一致し、そして良蔵が「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾の末尾に「文化八辛未秋八月 仙台 千葉尚伯綱識」と認めたことと整合性がある。しかし残念ながら良蔵が春林軒に滞在した正確な期間についてはこれまでに得られた史料では不詳であるが、1812年には播州に移動したとされているので、およそ1年と算しても大きな過ちを犯してはいないであろう。

3 千葉良蔵の

「辨乳岩証并治法艸稿」について

「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾は前述したように内題であるが、外題は「南紀青洲先生乳巖治術口授」とあり、「内題」と本文で繰り返し使用されている「岩」でなく「巖」の字が使用されているが、千葉の手になると考えられる。15丁の写本で、縦25cm、横15.5cmで、彩色である(図1)。半丁に12行、一行は22字記されている。1丁表1行に内題の「辨乳岩証并治法艸稿」が示されている(図2の右)。良蔵のご子孫である千葉陸美氏のご教示によれば、同家に遺されている良蔵の自筆写本と比較したところ、筆跡が近似しているとのことであった。

この草稿は文章と図譜からなり、文章は前半と後半の2部に分けられ、前半は「見出し」はないが、「辨乳岩証」に相当する部分で、1丁表から3丁表7行までで、乳癌の性状、症状、青洲が画期的手術法を開発したこと、乳岩の鑑別法、腋下への転移、症例、再発の問題が述べられている。3丁表8行からは後半の「治法」で術前の患者の精神的安静、麻沸散の投与時期、投与後の処置、投与後の症状、切開法、腫瘍摘出法、止血法、腫瘍摘出後の創口の処置、切開創の縫合法、創口の処置、排膿法、抜糸法、手術後に必要な軟膏や内用薬などが8丁裏まで記され、末尾に「文化八辛

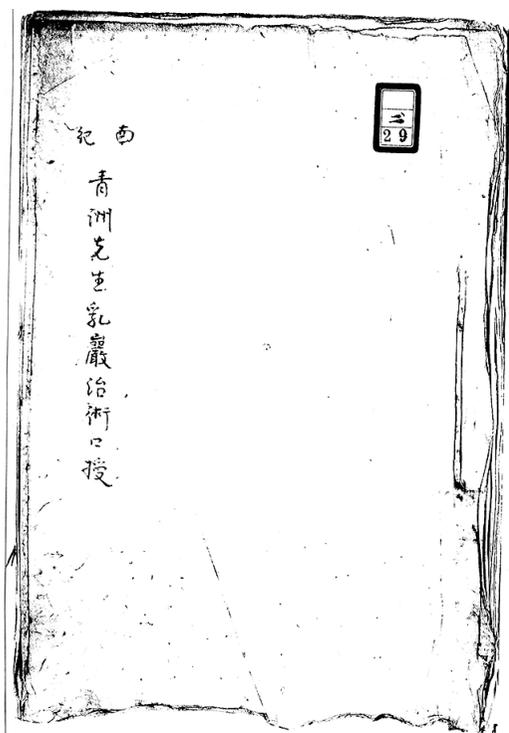


図1 千葉良蔵の「南紀青洲先生乳巖治術口授」の表紙

未秋八月 仙台 千葉尚伯綱識」とある（図2の左）。9丁表から15丁裏までは藍屋 勘に始まる乳癌の手術図、摘出腫瘍塊の図譜である。詳しくは表1の後半に示したとおりである。

以上記したように、この写本は千葉が春林軒で青洲から学んだ乳癌の手術的療法をまとめたものに、春林軒に所蔵されていた手術図を加えて一巻としたことが理解されよう。口述したのは青洲であるが、千葉の意見も諸所で述べられている点は注目される。重要なことはこの草稿が後年回顧して執筆されたものではなくして、千葉が修行中に春林軒で執筆された点である。これは記述の信頼性を高めるものであろう。

4 「乳岩辨証」と「乳岩辨」

呉はその著の「外傷以外の外科的疾患及び其手術」の冒頭に「乳岩」の項目を挙げ、写本「乳岩辨証」と「乳巖辨」を参考にして論じている¹³⁾。呉の用いた写本を直ちに特定することは出来ないものの、このことは「乳岩辨証」と「乳巖辨」は内

容の異なった写本であると推察させる。さらに佐藤持敬が編纂した「華岡氏遺書目録」¹⁴⁾にも「乳岩」を冠する題名の写本が二冊示されており、一つは「乳岩辨」、他は「乳岩辨証」である。前者の「乳岩辨」の下に注が附され「一名辨乳岩証治法。草稿。乳岩準附録。」とある。この注は佐藤持敬によるものである。この注に拠れば「乳岩辨」と「辨乳岩証治法」は同書ということになる。またこの記述に従えば「乳岩辨」は「乳岩準」の「附録」とも解釈されかねない。しかし現存閲覧できる多くの写本の「乳岩辨」、「乳岩準」、「乳岩準附録」はそれぞれ全く別個のものである。

佐藤の注にある「乳岩辨」つまり「辨乳岩証治法」の題は前述した千葉の草稿の内題「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾と近似している点は注目すべきである。しかしこれだけでは佐藤の「華岡氏遺書目録」¹⁴⁾に見られる「乳岩辨」と「乳岩辨証」の異同、さらにこれらと千葉の「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾との異同は不詳である。このためまず「乳岩辨」、「乳岩辨証」に関連して数種の写本について内容を調べると次のような結果になる。

「乳岩弁」¹⁵⁾

：病症＋治験*＋治法＋止出血妙術＋乳岩準＋春林軒方録・膏方部

*見出しはないが「病症＋治験」で「辨乳岩証」に相当

「青洲先生乳岩治法」¹⁶⁾

：病症＋治験*＋治法＋薬方**＋図（5丁、患者名欠）＋兎口治術＋救溺死法

*見出しはないが「病症＋治験」で「辨乳岩証」に相当

**麻沸散や他の麻酔薬の処方に記載

「乳岩辨」¹⁷⁾

：辨乳岩証＋治法＋止血術並方＋乳岩準附録*

*これは「乳岩準」と「乳岩準附録」を含む

「乳岩辨」¹⁸⁾

：病症＋治験*＋治法＋止血辨並方＋薬方**

*見出しはないが「病症＋治験」で「辨乳岩証」に相当、千葉の言葉を含む

**内容は「乳岩準附録」

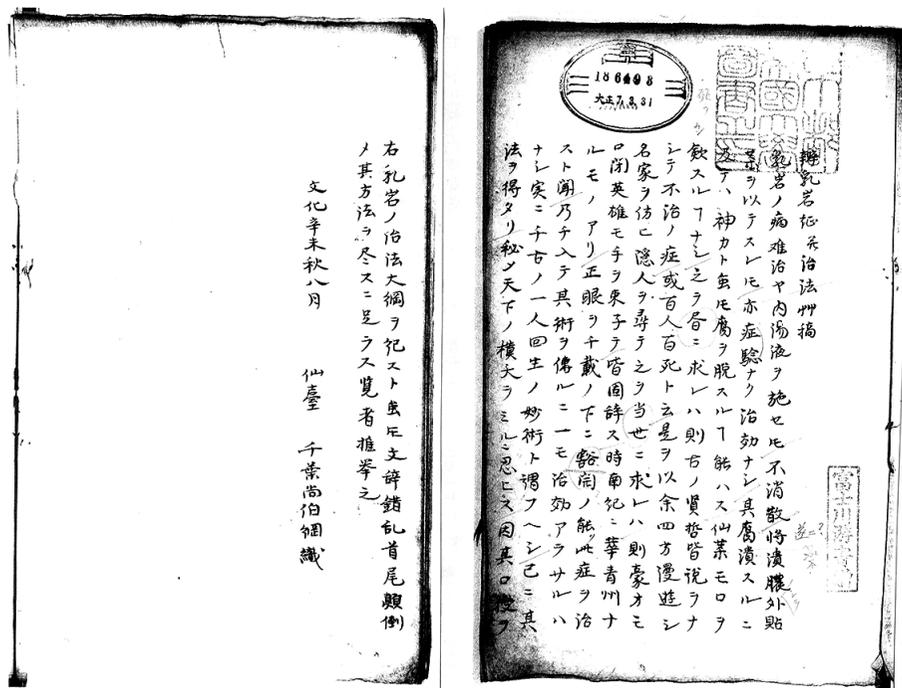


図2 千葉良蔵の「南紀青洲先生乳巖治術口授」の1丁表(右)と8丁裏(左)

「乳岩辨証」¹⁹⁾

：辨乳岩証＋治法＋止出血術＋乳岩準附録*
＋乳岩附録**

*これは「乳岩準」の誤記，**これは「乳岩準附録」の誤記

「乳岩辨症」²⁰⁾

：乳岩辨＋乳岩準附録＋辨乳岩症并治法草稿
＋乳岩準＋附録＋図6丁（患者名あり）＋
麻葉の処方（写本「乳岩辨＋乳岩準附録」
と写本「辨乳岩症并治法草稿＋乳岩準＋附
録＋図6丁」を合冊したものである）

つまり佐藤持敬が「華岡氏遺書目録」に示して以来、青洲の乳癌手術を伝える医書には「乳岩辨」と「乳岩辨症」の二種があるとされてきたが、基本的には両者は千葉良蔵の「辨乳岩証并治法草稿」⁸⁾を核とするもので、それに後年、書写者によって様々な論考や処方集が付加されて「乳岩辨」や「乳岩辨証」が出来上がったことが一目瞭然であり、「乳岩辨」と「乳岩辨証」との間に根本的差異は認められない。断定するまでには至って

いないが、千葉の「辨乳岩証并治法草稿」⁸⁾の書写が繰り返された結果、一部は題名が「乳岩辨証」となり、その題名から「証」の字が脱落して「乳岩辨」が生まれたと推察される。時期的に同時に「乳岩辨証」と「乳岩辨」の異なった題名の写本が生まれた可能性も否定できない。

5 千葉良蔵の「辨乳岩証并治法草稿」と「乳岩辨」の比較

以上述べたように「乳岩辨証」と「乳岩辨」が基本的に同じであることから、両者の写本の中で著者が閲覧できた最も古い「乳岩辨」の写本¹⁵⁾と千葉の「辨乳岩証并治法草稿」⁸⁾を比較検討する。

この「乳岩辨」の写本¹⁵⁾は、外題、内題共に「乳岩辨」で、一丁表に「森氏開萬冊府之記」の印などがあることから森立之の旧蔵本であったことが知られる。書写者は不詳であるが、写本末尾に「文化十二年乙亥夏四月十五日 於左海中村屋膳写終」とある。この年まで青洲の末弟華岡鹿城（良平）が堺で開業していたので、その門人が堺（左海）で筆写したのであろう。その内容は、「前

表1 写本「辨乳岩証并治法艸稿」の内容

表紙：「南紀青洲先生乳巖治術口授」表紙裏に文字なし

1 丁表：内題は「辨乳岩証并治法艸稿」「京都帝国大学図書館」，「富士川文庫」，整理番号（186498）と受入日（大正7.3.31）の印。
千葉の序。末尾に「已に其法ヲ得タリ。秘シテ天下ノ横夭ヲミルニ忍ヒス。因テ其口述ヲ記聞鄙言ヲ加ヘ同志ニ与テ世ニ公ニセント欲。」とある。1丁裏1行まで。

1 丁裏2行～2丁表4行まで：乳癌の症状，鑑別，全身症状などについて，青洲の言葉（15行）を引用。これに続いて千葉の意見が2丁裏後2行まで20行続く。

2 丁裏後1行～3丁表7行まで：青洲の言葉（3行）と千葉の意見（5行）

3 丁表後5行：「治法」術前の患者の精神的状態について（4行）

3 丁裏1行～6行：麻沸散の投与時期について
7行～後2行：麻沸散投与後は暗室に患者を寝かせること（5行）

3 丁裏後1行～4丁表9行：麻酔の程度の判定法と手術の準備（10行）

4 丁表後3行～5丁裏2行：手術方法と止血の方法（29行）

5 丁裏3行～6丁表5行：切開創の処置（15行）

6 丁表6行～後3行：麻沸散からの覚醒法（5行）

6 丁表後2行～6丁裏11行：術後管理，排膿について。華岡流と千葉の方法（13行）

6 丁裏12行～7丁裏5行：術後管理，抜糸法（18行）この条の末尾に「手術妙処紙筆載セ難キ処ハ口授面命ニテ之ヲ傳フ」とある。

7 丁裏7行～8丁表11行：手術時の用いる軟膏や内服薬。金創油，人参調榮湯，前衝膏，先鎚膏方，先鋒膏方（17行）

8 丁裏1～3行：「右乳岩ノ治法ヲ記スト雖共，文辭錯乱首尾顛倒シテ其方法ヲ尽スニ足ラス。覽者推挙之。文化辛未秋八月 仙台 千葉尚伯綱識」とある。

9 丁表：乳房に切開創が入った図（正面から見た図）
9 丁裏：切開創に左手を挿入した図（側面から見た図）

10 丁表：切開創の両手を挿入した図
10 丁裏：切開創の両手を挿入した図（腫瘍を取り出そうとしている図）

11 丁表：摘出腫瘍塊の図。真上と斜め上からの2図。右に「和州宇智郡五條駅藍屋利兵衛母年六十」とある。

11 丁裏：摘出腫瘍塊を縦割した図。右に「其二」とある。

12 丁表：摘出腫瘍塊の図。腫瘍塊と横分割した2図。右に「阿弼徳島沖之洲水主平七母年五十六」とある。

12 丁裏：乳房と腫瘍の図。図の下に「有紫色之厚限兼黒色」とある。右に「紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻四十三既穿潰而径五六日其困八寸其深一寸」とある。

13 丁表：摘出腫瘍塊の図。図の上に「紫黒死血有斑」とあり，右上に「紀州有田郡須原村佐五衛門母年六十四有既欲穿潰之勢」とある。

13 丁裏：摘出腫瘍塊の図。右上に「紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻年四十三」，図の下に「紫黒色有斑」とある。

14 丁表：摘出腫瘍塊の縦割図。上に「有田郡須原村左五兵衛門母年六十四」とある。

14 丁裏：切開創のある乳房の図。上に「飛州高山広瀬利兵衛妻歳五十二」とある。

15 丁表：摘出腫瘍塊の図。上に「以規秤之重三百七十錢 其二」とある。

15 丁裏：摘出腫瘍塊切開面の図。上に「其三」とある。

裏表紙：文字なし

文」（見出しはないが，乳癌の症状，鑑別法，症例などが記されており「辨乳岩証」に相当），「治法」，「止出血妙術並方」，「乳岩準」，「春林軒法方録（膏方部）」である。分りやすく言えば，「辨乳岩証」と「治法」に「止出血妙術並方」その他を併せたものである。

「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾の本文と「乳岩辨」¹⁵⁾の「辨乳岩証」に相当する文と「治法」の本文を比較したのが表2である。両史料の各段落の最初

の20字を抜書きしたが，一覽して両者はほぼ「同一の内容」であると見做してよいと考えられる。注目すべきは「乳岩辨」においては，「辨乳岩証并治法草稿」⁸⁾の中で明記されている千葉の言葉が削除されていることである。例えば，冒頭の千葉の言「乳岩ノ病難治ヤ内湯液ヲ施セ共」（1丁表2行）から「鄙言ヲ加ヘ同志ニ与テ世ニ公ニセント欲ス」（1丁裏1行）までの12行は削除されている。また3丁表3行の「尚案ニ右ノ諸証ヲ見

表2 「辨乳岩証并治法艸稿」と「乳岩弁」の本文の比較
 (段落、段落中の主要な部分、箇条書きの部分の最初の20字)

「辨乳岩証并治法艸稿」	「乳岩弁」
1 丁表2行： 乳岩ノ病難治ヤ内湯液ヲ施セ共不消散將潰膿	なし
1 丁表7行： 時南紀ニ華岡青洲ナルモノアリ正眼ヲ千載ノ	なし
1 丁表後1行 ミルニ忍ヒス因其口授ヲ記間鄙言ヲ加ヘ同志	なし
1 丁裏2行 一乳岩乳癰大ニ異ナリ乳癰ハ内吹上下順逆ノ	2 丁表1行 乳岩ハ乳癰ト大ニ異也乳岩ハ内吹上下順逆之
1 丁裏8行 乳岩ハ腐スト雖共硬ニシテ水ヲ流ス故ニ刺破	2 丁表後1行 乳岩ハ腐スト雖刺破ヲ欲セス若刺破スレハ必
2 丁表9行 散堅消塊ノ治モアルヘキカ余未治之后学者試	2 丁裏後2行 散堅消塊ノ治モ有ヘキカ余未見后学者試之
2 丁表後2行 一男子ニ此病アリト聞共余未見之	3 丁表1行 一男子此病有ト聞共未是ヲ不見
2 丁表後1行 一濃州某ノ母乳岩ノ治終リテニ三日ヲ経胸肋	3 丁表2行 濃苧某母乳岩ノ治納リテニ三日ヲ経テ胸肋ヨ
2 丁裏3行 又泉州某ノ妻乳岩ノ初起ニシテ梅核大ノ如シ	3 丁表6行 泉苧某妻乳岩ノ初メ梅核大ノ如ナル者アリ前
2 丁裏後1行 一青洲曰乳岩大小浅深上下ニ拘ラス腐潰セサ	3 丁裏3行 青苧先生曰乳岩ハ上下左右浅深ニ拘ラス腐潰
3 丁表3行 尚按ニ右ノ諸症ヲ見スト雖共核形未乱者ハ術	3 丁裏6行 按スルニ右ノ諸症ヲ見スト雖核形イマタ乱レ
3 丁目表9行 初患者ノ精神ヲ整ニ乳岩ノ患ニ因テ勞衰スル	4 丁表1行 初患ノ者精神ヲ整一乳岩ノ患ニ因勞衰スルヲ
3 丁裏1行 早旦ニ麻沸散ヲ用ヒ早旦ニ用ルハ空腹ヲ欲ス	4 丁表3行 早旦ニ麻沸散ヲ用ヒ早旦ニ用ルハ空腹ヲ欲ス
3 丁裏7行 閑室ニ安臥セシメ衾を覆ヒ麻沸散ヲ服シテ后	4 丁表後3行 閑室ニ安臥セシメ衾を覆ヒ麻沸散ヲ服シテ后
3 丁裏後1行 瞑眩度を得テ衾ヲ払ヒ褥ヲ除キ患者ヲシテ仰	4 丁裏1行 瞑眩度を行テ衾ヲ払ヒ褥ヲ除キ患者ヲシテ仰
4 丁表後3行 即チ左手ニテ岩根ヲ緊握シ岩ヲシテ運動セシメ	4 丁裏後2行 即左手ニテ岩根ヲ能握リ岩ヲシテ運動セシメ
4 丁裏6行 瘡口ニ手ヲ入結核ヲ皮肉ノ間筋絡ノ纏ヲ処ニ	5 丁表6行 割破シテ瘡口ニ手ヲ入レハ核ト皮肉ノ間筋絡
5 丁表4行 脉絡ヲ断モノハ出血飛走シテ止難シ和漢古今	5 丁裏1行 血絡を断血飛走テ止利カタシ家法血止ノ法ヲ
5 丁裏3行 結核ヲ去リテ后焼酎ヲ温メテ瘡口ノ瘀血ヲ洗	6 丁表2行 結核ヲ去リテ后焼酎ニテ湿メテ瘡口ノ瘀血ヲ
5 丁裏後2行 而后瘡口ノ四辺ニ椰子油ヲ塗リ結疑ヲ防キ疼	6 丁表後3行 而后ニ瘡口ノ四辺ニ椰子油ヲ塗リ結疑ヲ防キ
6 丁表6行 瞑眩劇易遅速アリトイヘ共大氏五六時ヲ経テ	6 丁裏4行 瞑眩劇易遅速有ト云共大抵五六時ヲ経テ覚ム
6 丁表後2行 花岡家金瘡其他刺割ノ治法出血アルモノニ必	7 丁表1行 花岡家金瘡刺割ノ治法血出ル是方ヲ用全家金
6 丁裏後3行 膿ヲ抜クハ必シモ次日ヲ期セス患処腫痛スル	7 丁表後3行 膿ヲ抜クハ必シモ胆セス患処腫痛スル膿有也若
7 丁表8行 縫糸緊急シテ転移セサルハ未付ノ候也其付時	7 丁裏4行 縫糸緊急シテ転移セサルハ未付ノ候也其付時
7 丁裏4行 手術妙処紙筆ニ載セ難キ処ハ口授命命ニテ之	7 丁裏後1行 術ノ至妙ナルハ紙筆ニ載セカタシは面論ニ口
7 丁裏7行、後2行 金瘡油、人參調榮湯	なし(調榮湯は「乳岩準」の冒頭に見られる)
8 丁表3行、5行、8行 前衝膏、鍵膏方、先鋒膏方	なし
8 丁裏3行 文化辛未秋八月 仙台 千葉尚伯綱 識	なし

スト雖共」の「尚」（千葉の名）が削除されている。もちろんこの史料の末尾にある「文化八辛未秋八月 仙台 千葉尚伯綱識」の条も削除されている。しかし削除の見落としもあり、6丁裏2行の「余家金瘡ノ治法花岡家ノ治法ト大ニ異ル」は明らかに千葉の言葉であるが、そのまま残されている。この削除の理由は不詳としか言いようがないが、手本とした写本でこの部分がすでに失われていたのか、あるいは意図的に青洲の教えだけを録して世に広めようとして千葉の言葉を削除したのであろう。

6 千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」の内容の検討

ここでは千葉が観察した乳癌の症例について検討する。2丁後1行に「濃州某ノ母乳岩ノ治終リテ二三日ヲ経胸肋ヨリ頸項ニ引テ強痛ス」とある。さらに2丁裏3行に「又泉州某ノ妻乳岩ノ初起ニシテ梅核大ノ如シ」とある。さらにこの丁では再発、三発の症例もあることを伝えている。千葉が春林軒に入門したのは1811年の閏2月13日で、「辨乳岩証并治法艸稿」⁸⁾を書き上げたのは同年8月である。この間、春林軒で青洲が手術した患者は「乳巖（岩）姓名録」²¹⁾によれば次の通りである。

文化八 <small>辛未</small> 年四月 九日	美濃大垣	猪股七太夫 母
四月十八日	紀州丸栖	善七 妻
五月十九日	泉州尾崎	山崎 佐七 妻
八月念二	摂州兵庫尻池村	光福寺 室
	淡州田中村	甚兵衛 内

千葉の云う「濃州某ノ母」は「美濃大垣 猪股七太夫 母」であり、「泉州某ノ妻」は「泉州尾崎 山崎 佐七 妻」として間違いない。入門して間もない千葉が直接手術には加わらなかったとしても、患者を観察できる立場にあったことは、春林軒における教育が比較的自由に、そして能率的であったことを示すものであろう。

再発例は「文化六年九月十三日」に手術を受け

た「三河屋治兵衛 母」、そして三発は「文化六年二月十二日」に3回目の手術を受けた「重助内」で、いずれも千葉が入門する前の症例であるが、再発、再々発の情報が門人の間に伝えられていたことが分る。最初の手術から5年経過した時点で、青洲は再発、三発の問題に直面し、門人にもこのことについて教授していたことが推察される。

千葉の記述は大約手術の流れに沿った書き方をしているが、それぞれの項目について青洲の教えを要約して記している。その中でも青洲の止血法は優れているとしたが、「同道者」でなければ教えないとし、一種の秘伝とされたことが分るが、この止血法の大約は後に「止血妙術並方」として新たな項目として「乳岩辨」に記述されるようになった。

千葉は本文の末尾に乳癌の手術時に使用される内用薬と外用薬を述べてその処方を書いている。金瘡油、人参調栄湯、前衝膏、錠膏方、先鋒膏方であるが、これは独立した項目として記されていない。後年の写本ではこれが大きく改められて新しい項目の「乳岩準」（調栄湯、当帰芍薬散、バルサルコツハイハ、野牛膏、家猪膏）が誕生したと考えられる。秘伝とされた「麻沸散」の処方について記載がないのは当然であるが、写本によってはその処方に言及しているものがあるが²⁰⁾、それは後年の書写であることを示すものである。

7 「辨乳岩証并治法艸稿」中の「治法」の内容の検討

「辨乳岩証并治法艸稿」の前半の「辨乳岩証」は乳癌の症状、鑑別診断などを述べたものであるが、後半の「治法」は実際の治療について具体的に述べたものである。まず患者の精神的疲労を治療すべきとしているが、これは原疾患や併発疾患による疲労のみならず、遠路はるばる紀州への長旅の疲れをも考慮しなければならないとしたもので、ここに青洲の患者への温かい配慮を見出すことができよう。3丁裏から4丁表の1丁は麻沸散投与に際しての諸注意で、早朝に服用させること、これで昼ごろに手術が可能になること、遅く

服用させると夕刻に手術を行うことになり暗くなって手術に不便であること、瞑眩の度合、つまり麻酔の深さは個人によって異なるが、一般的に顔は紅潮し、脈は浮となり、口舌は乾燥し、散腫が見られ、妄語する。手術に際して患者の四肢を弟子に保持させるのは、体動を防ぐためであり、麻沸散による麻酔が浅いものであったことを示唆する。

次に腫瘍摘出の手順について述べているが、腫瘍の取り残しについて細心の注意を払うことを述べ、取り残しがあれば一旦治ったかに見えても必ず再発するとしている。腫瘍が大きければ、誤って肋間動脈を傷つけることがあるので注意する。止血の方法について「花岡家血止ノ法ハ実ニ先賢未発方」であるとしているが、その具体的方法は記されていない。これは出血部位を指で圧迫し、その中枢側に深く針糸を掛けて結紮する方法と思われる。

さらに記述は腫瘍摘出後の創部の処置、縫合法、抜糸、排膿法に及んでおり、これは金創治療一般の方法に準じたものである。最後に乳癌手術で常用される薬剤、金瘡油、人参調榮湯、前衝膏、錠膏方、先鋒膏方の処方を書き記し、「右、乳岩ノ治法大綱を記スト雖モ、文辞錯乱首尾顛倒シテ其方法ヲ尽スニ足ラス。覽者推挙之。」(句読点一松木)と「治法」を結んでいる。

8 手術図について

3の「千葉良蔵の『辨乳岩証并治法艸稿』について」において述べたように、この写本の後半、つまり9丁表から15丁裏までは藍屋 勘に始まる乳癌の手術図、摘出腫瘍塊の図で、表1に示したとおりである。この図の部分は別に作られた冊子を合冊したのではなくして、同じ紙質の用紙に描かれて綴られたと思われ、図の説明文の字も、「彡」の書き方、「木」偏の第4画を書かないことなどの類似点から、本文と同筆と思われる。

腫瘍図の「重助妻」は重複しているが、乳房の腫瘍部位を示した図と摘出腫瘍塊を別個の丁に描いたものである。また腫瘍図「佐五衛門母」は他の個所で「左五兵衛門母」ともなっているが、住

所、年齢が同じであるので同一人物見て間違いなく、摘出腫瘍塊とその縦割図を別の丁に描いたものである。原図において既に氏名の混乱があったと推察される。「乳巖(岩)姓名録」²²⁾による手術日を併せて示しておく。

和州宇智郡五條駅藍屋利平衛母 年六十

……文化1年10月13日

阿州徳島沖之洲水主平七母 年五十六

……文化5年3月7日

紀州有田郡保田郷杉野原村重助 妻四十三

……文化5年6月13日

紀州有田郡須原村佐五衛門母 年六十四

……文化5年5月16日

紀州有田郡保田郷杉野原村重助妻 四十三

有田郡須原村左五兵衛門母 年六十四

飛州高山広瀬利兵衛妻 歳五十二*

……文化7年5月11日

*：広瀬利兵衛妻の手術日についての「乳巖姓名録」の記述「文化十年九月既望」は誤りである。

千葉が上記の5人の患者の図を描いた理由は不詳である。1811年頃の乳癌手術の図は殆ど知られていないので、この頃は一時的にせよ乳癌の手術に際して図が描かれなくなっていたのかも知れない。そのため千葉は以前に作られた図を模写して自分の草稿に収めたのであろう。

千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」は1811年当時の華岡青洲の乳癌手術を伝える貴重な史料で、外題は「南紀青洲先生乳巖治術口授」である。これが繰り返し書写されて「乳岩辨証」さらには「乳岩辨」になったと考えられる。

擱筆するに際して種々貴重なご教示を戴いた宮城県石越町の千葉陸美氏に深謝の意を表する。

参考文献および注

- 1) Matsuki A. *Seishu Hanaoka and His Medicine—A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery*. Hirosaki: Hirosaki University Press; 2011. p. 152–5.
- 2) 多くの文献では「通仙散」、一名「麻沸散」と記

して、「通仙散」が正式名であり、「麻沸散」が別名であるかのように記しているが、これは大きな謬見である。青洲自身「乳巖治驗録」の中で「麻沸散」の語を使用し、そして本間玄調、鎌田玄玄らの高弟の著書ではいずれも「麻沸散」、「麻沸湯」の名称が使用されており、「通仙散」は披見されない。この名は青洲の死後、合水堂の二代目の主宰である華岡南洋が唱えたものらしく、彼の医術を伝える図譜中に披見される。詳しくは下記文献を参照されたい。

松木明知. 華岡青洲は“通仙散”とは書かなかつた——“麻沸散”と“通仙散”の呼称の問題——. 麻酔 2015; 64: 1101-5.

- 3) 文献 1. p. 45-68.
- 4) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂；1923. p. 274-86.
- 5) 文献 4. p. 254-60.
- 6) 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学集成 29 (華岡青洲一). 東京：名著出版；1980. p. 279-81.
- 7) 文献 6. p. 488-9.
- 8) 京都大学附属図書館 (富士川文庫) 所蔵 (富士川二 29)
- 9) 石越町史編纂委員会編. 石越町史. 石越：石越町役場；1975. p. 456.
- 10) 二宮以義. 医人伝 (その四) —— 地域の衛生行政の先覚者達 (登米の巻). 宮城県医師会報 1977; (374): 112-3.
- 11) 玉手英典. 岩谷堂岩城氏家中医千葉良蔵明溪. 日本医学雑誌 1942; (1299): 22-9.
- 12) 文献 4. p. 468.
- 13) 文献 4. p. 254-60.
- 14) 文献 4. p. 382.
- 15) 京都大学附属図書館 (富士川文庫) 所蔵 (富士川二 30)
- 16) 京都大学附属図書館 (富士川文庫) 所蔵 (外題は「春林軒乳岩治法」) (富士川 シー二二)
- 17) 研医会図書館所蔵 (「天刑秘録」と合冊) (番号 4763)
- 18) 東京大学附属図書館 (鶯軒文庫) 所蔵 (「鹿城先生医譚」, 「花岡載断篇」と合冊, 内題は「辨乳岩記並治法」) (請求番号 V11 : 1769)
- 19) 研医会図書館所蔵 (番号 4764)
- 20) 島根大学附属図書館 (大森文庫) 所蔵 (番号 3117989)
- 21) 文献 4. p. 277.
- 22) 文献 4. p. 274-6.

Ryozo Chiba's *Ben-nyugansho narabini Chiho Soko* and *Nyuganbensho* or *Nyuganben*: The Practice of Hanaoka's Breast Cancer Surgery in 1811

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hiroasaki University Graduate School of Medicine

In 1811, Ryozo Chiba (1789-1861) from Sendai Province enrolled in a private school of Shunrinken, presided by Seishu Hanaoka and wrote up a manuscript titled *Nanki Seishu Sensei Nyugan Chijutu Koju* (the title on the first page is *Ben-nyugansho narabini Chiho Soko*) in August 1811, only 6 months after enrollment. The manuscript describes Hanaoka's teachings about breast cancer surgery; signs and symptoms of breast cancer, differential diagnosis, preoperative care, administration of Mafutsusan, operative procedures, hemostatic techniques, wound suture, wound dressing, recovery from anesthesia with Mafutsusan, postoperative care, and prescriptions of drugs for internal and external use. After repeated transcriptions and the addition of various papers on other subjects, the title of the manuscript changed to *Nyuganbensho* or *Nyuganben*. Chiba's original manuscript is considered important because the transcriber and the year of transcription of the manuscript are identified, and it unfolds the practice of Hanaoka's breast cancer surgery as of 1811.

Key words: Ryozo Chiba, Seishu Hanaoka, *Ben-nyugansho narabini Chiho Soko*, *Nyuganbensho*, *Nyuganben*